

陸上競技走り幅跳びにおける四肢のラテラルリティの関連について

高田 凌佑（愛媛大学大学院）

1. 研究目的

本研究の目的は、四肢のラテラルリティ確立時期にあたる小学生を対象に、質問紙調査および測定結果から、走り幅跳びの踏み切り足と四肢のラテラルリティの関連を推測し、踏切足を選択するための指導時の一助となる知見を得ることである。

2. 研究方法

1) 対象者

小学生男子136名と女子86名の合計222名。

2) 調査方法

ラテラルリティに関する15項目の質問紙調査および、立ち幅跳び、走り幅跳び、20mケンケン、20mドリブル走、開眼片足立ち、膝伸展力、大腿囲、下腿囲の測定を行った。

3) 分析方法

質問紙調査結果は、左右同数を帰無仮説に χ^2 検定より有意差検定を行った。測定結果は、t検定により有意差検定を行った。

3. 結果および考察

質問紙調査より、走り幅跳びと支持脚とされる側の関連はあるものの、機能脚とされる側でも同様に関連があり、支持脚が力発揮の足と一致する結果とはならなかった。また、測定結果も同様に走り幅跳びの記録と支持脚とされる項目だけでなく機能脚とされる項目にも関連があり、支持脚のみに関連がある結果とはならなかった。

1) 利き手および利き足と各質問項目の一致率

利き手と文字を書く手の一致率が最も高く、利き足とボールを蹴る足の一致率が最も高い結果であり、利き手は文字を書く手の側で認識し、利き足は、約7割がボールを蹴る足が利き足と認識している傾向にあった。走り幅跳びの

踏み切り足と最も一致率の高いものは、下肢はボールを蹴る足であったことから、ボールを蹴る足や利き足と認知される側で走り幅跳びの踏み切りを行うことが多い傾向にあることがうかがえる。

2) 走り幅跳びの測定結果との比較

利き足の結果において高学年男女で認知側と非認知側の差が最も大きく、平均値も最も高い。よって、高学年において利き足と認知される側の足で踏み切りをすることにより好記録を望むことができる。また、上肢も日常生活や運動場面でよく使用する側において、高学年ではよりよい記録を出すことができる傾向にあった。

3) 運動習慣の有無の比較

質問紙調査の利き足と走り幅跳びの踏み切り足の項目において運動習慣の有無で不明の回答者数に有意に差があることから、発達過程における運動習慣の有無や運動経験が利きの出現に影響を与えていることが示唆された。

4. まとめ

ラテラルリティの確立時期における小学生の日常生活や運動習慣および経験は、その後の利き側に大きく影響することが示唆され、成人を対象とした報告と差があることから、小学生以降も利き側の変化があることが推測できる。また、日常生活や運動場面においてよく使用する側での跳躍が、より良い記録を出すことができることが示唆された。

5. 主な参考文献

石津希代子（2011）利きの発達と左右差。日本大学大学院総合社会情報研究科紀要, 12: 157-161.